

バプテスト資料室開設にあたって — 資料を古紙に、資料室を倉庫にしない —

金丸 英子

学院史資料センター（以下、「資料センター」）では、2023年5月、学院百年館内に「西南学院バプテスト資料室」（以下、「バプテスト資料室」）を開設することになった。本稿では、その経緯を簡潔に記し、バプテスト資料室の使命と目的を述べる。

1. 開設までの経緯

このたびのバプテスト資料室開設は、1976年、当時干隈にあった神学部の「西南学院大学神学部資料室」（以下、「旧バプテスト資料室」）の設置に遡る。当時の学部長中村和夫は、部長印押捺の公文書で以下のように開設目標を説明し、その協力を日本バプテスト連盟の諸教会に訴えた。

神学部に新しい企画が発足致しました。去る7月22日の神学部運営委員会と教授会の決議によって、「資料室（実践神学部門）」の設置が決まりました。（略）教会組織、按手礼、その他の研修や調査に訪れる関係各位に広くお役に立つ「資料室」を作り上げよう（略）なお実践神学部門担当の鍋倉勲講師とこの企画の提唱者吉田晃児牧師（久留米バプテスト教会）のお2人に助言と指導をお願いしております。地方連合、連盟、その他の資料も順次集めますが、まず教会関係のものから始めます。（略）資料を御送付いただければ大変幸甚に存じます。「西南学院大学神学部資料室」が、今後大きく発展する日本バプテスト連盟の諸教会にお役に立ち得るよう、皆様の御支援、御協力を切にお願い申し上げます。

昭和51年8月28日

神学部長 中村 和夫

それによれば、旧バプテスト資料室は「神学部運営委員会」の席上、連盟関係者と教授会の協議を経て設置が決定された。その目的は神学教育、特に実践神学の教育の

ためであったが、設置の発案は神学部教授会よりも連盟関係者の方が積極的であった。よって、資料室の利用対象者も神学部関係者に限定されず、広く「関係者各位」となっており、神学部の授業だけではなく、諸教会の研修やリサーチのためにも開かれることが希望された。運営のための実質的な事務は神学部関係者が担当し、それ以外の指導や助言、サポートは神学部関係者と教会関係者が半々で担うことになった。今でこそ日本バプテスト連盟には「資料保存・管理委員会」が設置され、そのための空間が事務所内に確保されているが、当時はそのような部署がなかったためか、神学部図書部門の働きのひとつとして旧バプテスト資料室が開設され、神学部と連盟の共同運営の運びとなったと思われる。

その後 2001 年 4 月の神学部西新キャンパス移転に伴い、旧バプテスト資料室の運営と目的は大きく変化した。まず、神学部図書部門が大学図書館に統合された。しかし、旧バプテスト資料室の書籍や資料は行き先が定まらず、最終的には書籍類は新たに分類されて大学図書館に所蔵され、その他資料の一部（視聴覚関係を含む）は大学旧図書館の 5 階の、人の目に触れることの少ない場所に、それも未整理のまま保管されるに至った。因みに筆者は必要があって何度もそこを訪れているが、人の気配のない「倉庫」のような印象が残っている。諸資料が「行き先を失った」理由は、それらが大学図書館の所蔵資料としての性格を有さないうえ、その中に、西南学院の歴史を知る上で貴重な資料も多く混じっているため、学内に大学図書館とは別に保管・閲覧できる場所を確保するようにとの要請が、大学図書館から当時の西南学院百年史編纂委員長に寄せられた。

百年史編纂委員会はそれを受けて協議し、その結果、学院創立 100 周年を記念して建設された百年館（松緑館）に資料センターが設置されたことから、日本におけるバプテスト研究、九州におけるプロテスタント研究の拠点となるようなバプテスト資料室の設置を学院に提案することにした。実はそれには伏線があり、これに先立ち、学院と神学部の間で「バプテスト連盟関係資料の利活用について」協議されている。学院側から 100 周年事業推進室を經由して「バプテスト連盟関係資料等の 100 周年事業推進室への移管」の願い書（2015 年 10 月 26 日付）が神学部に出され、当時の神学部長須藤伊知郎は同年 12 月 17 日付で以下のような回答を送っている。

1. 今後、バプテスト連盟関係の史資料に関し、継続的に発刊され受入を要するものがあるか。
(回答) 今後、継続的な受入の予定はございません。
2. 管理・保存する史資料の利活用方法はどのようなものか。

(回答：2015年11月16日神学部教授会にて協議した内容)

- ①神学部の「実践神学」等の講義や、教会の現状分析、バプテスト連盟の会議資料・統計資料作成の際の参照資料として活用いたします。
- ②学院の歴史を調査するための資料として活用いたします。

来年度、開設されるバプテスト資料室が上述の使命を受け継ぐ施設であるとすれば、須藤の回答「2」の「①」は、干隈時代の神学部の旧バプテスト資料室の設置目的の一部である「その他の研修や調査に訪れる関係各位に広くお役に立つ『資料室』」を反映しているように思われる。そうであれば、利用対象者も学院関係者以外に開かれることが想定されていることになる。なお同回答の「②」は、百年史刊行後、資料センターの「西南学院アーカイヴズ」事業や大学の「西南学院史講義」に引き継がれている。旧バプテスト資料の所蔵と保管が神学部から学院に移ったということは、今後、これら資料群の保管・活用は学院が責任を持つことを意味している。そうであれば、資料センターの運営、同センターの中長期に関する事業計画、人事計画などは学院の理念とリーダーシップの下で進められることが期待される。しかしこれまで、後述するように、実際のところは、学院史資料の保管や取り扱いはそのような認識によって組織的に行われたとは考えにくく、むしろ学院側の施設計画の枠内で対応され、資料保管やその責任部署もそれに沿って決定されて来た事実は認めねばならないであろう。

長い間、未整理のまま大学旧図書館5階に保管されていた神学部のバプテスト関係資料は新築の百年館3階の資料保管室に移動され、その後資料センターの働きの一部として、職員が整理や分類、配架を行った。加えて、資料センターは新資料の受け入れや追加、定期刊行物の補填なども行った。

資料センターの運営も軌道に乗り始めた2020年4月、関係者から神学部のバプテスト資料を今後どのように保管・活用し、新たな資料を収集するののかについて協議すべきとの声が出された。その結果、その課題に特化した検討委員会を立ち上げる必要を認識し、上位委員会の資料センター運営委員会に提議して、「バプテスト資料室検討委員会(以下「検討委員会」)」が設置される運びとなった。筆者が委員長を仰せつかり、百年史編纂事業に貢献をされた小林洋一大学名誉教授、伊原幹治元西南学院中学校・高等学校校長、松崎尚志社会連携課長(当時)の各氏が委員として加わった。この委員会は、西南学院のバプテスト資料室の開設に向けて今後の在り方を検討し、資料センター運営委員会に報告、提案を行うために、月1回のペースで開催された。その後、この検討委員会は発展・解消し、現在の資料保存・運営委員会となり、坂東資朗中学校・高等学校宗教部長、劉雯竹学院宗教主事、事務局から宮川由衣アーキビ

スト、山縣和彦資料センター職員を委員、小林洋一大学名誉教授、吉田直史社会連携課長を陪席に迎えて機能を果たしている。

2. 立ちはだかる諸課題の検討

検討委員会は資料室の2022年5月の開設を目指し、それに備えて考え得る限りの角度から課題の洗い出しを開始した。その作業の多くは、当時の高松千博センター職員に負うところが大きい。まず高松職員から、2017年に百年館3階に運び込まれた資料の全容が分類別に報告された。内訳は(1)全国の主なバプテスト教会の個別資料(教会総会資料、週報、『バプテスト誌』の記載記事のコピーを含む)、(2)各教会の年表、(3)バプテスト派の学校や機関の個別資料・年表、(4)バプテスト関連の年表、(5)戦前・戦中のバプテスト関連資料・会議資料(西部組合資料を含む)、(6)英文資料(Proceedings [1861-1897]、Gleanings [1894-1919]、SBC Annual [1898-1958])、(7)戦後のバプテスト連盟年次総会及び理事会資料、(8)バプテスト関連の冊子・機関誌・新聞等、(9)バプテスト以外の機関誌、(10)宣教師関連資料、(11)西南学院大学神学部関連資料、(12)キリスト教関連の旧書籍、雑誌(和書・洋書)、(13)視聴覚資料(レコード盤、VHSビデオ、カセットテープ、オープンリール、マイクロフィルム、フラッシュカード等、約2,000点)という、かなりの量であった。それが未整理のまま、旧バプテスト資料室、大学図書館を経て、資料センターに持ち込まれていたのである。この現状を確認し、開設に向けて検討された諸課題は以下の通りである。(1)規程の整備、(2)資料室における閲覧に関するルール策定、(3)関連諸機関との連携、(4)資料整備(具体的には、①所蔵資料の選別と補填による充実、②定期刊行物の追補、③宣教師文書関連資料の取り扱い、④資料分類の再検討とデータ入力、⑤貴重資料のデジタル化、⑥宣教師等の直筆サイン入り書籍の取り扱い、⑦視聴覚資料の取り扱いと整備)、(5)資料室の場所の確保、(6)具体的な運営、以上である。同時に、2022年5月開設のスケジュールも確認された。

その後の検討委員会は、以上の洗い出された検討諸課題についてより具体的に詰めた議論を行い、それに基づいて2020年9月に「『西南学院バプテスト資料室』の在り方に関する答申書」をまとめ、資料センター運営委員長の今井尚生学院長に提出した。同運営委員会はこれを承認し、2022年5月の開設を睨んで、具体的な取り組みが進められた。その一例は、バプテスト資料公開に関する大学図書館との協議と連携、検討課題(4)のための学生アルバイトの雇用、日本バプテスト連盟資料管理室との懇談などである。

しかし、その過程で、資料収集や所蔵資料公開の方針や実際、またそれに関連するルールの整備、バプテスト連盟担当部署との更なる認識共有および連携の実際に関係する諸課題が浮上してきたため、資料保存・運営委員会は協議の結果、開設を1年延期し、2023年5月開設に変更することにした。現在の計画では、2023年5月12日(金)の午後6時に開設記念行事を行い、東北学院大学学長の太西晴樹氏を講師にお迎えして、講演会を行っていただく予定である。これにあたり、学院より全面的な支援をいただくことが確認されている。これについて、この場で謝意を表したい。

3. 彷徨する学院史資料と資料室

西南学院は創立100周年を記念して『西南学院百年史』の刊行を決定し、その準備として百年史編纂準備委員会を設置した。学院は、編纂作業のための新たな資料の発掘と研究に資する『西南学院史紀要』を発刊した。この紀要は創刊号(2006年)から12号(2017年)を数え、百年史刊行とともにその役割を終えた。なお、その後継として本書『西南学院アーカイヴズ』が刊行されることになったことは記しておきたい。

全12巻の『西南学院史紀要』は実に様々な企画を盛り込み、読み物としては一定の内容を備えたものであった。その第3号(2008年)に「西南学院における学院史資料室・事務室の変遷」という興味深い論考が収められている。これは、当時企画広報課員であった世戸口職員が『西南学院七十年史』(以下『七十年史』)発刊を経て、当時(2008年)に至る学院史資料室・事務室の変遷を淡々と記録したものであるが、筆者にとっては学院の関係資料の保存とその意識や認識を知る上で有益な記録である。このたびのバプテスト資料室開設にあたり、改めてその論考を精読すると、バプテスト資料室の今後の運営に対する戒めのようなものを示唆されたように思う。

その論考は、移転を余儀なくされた学院史資料室の姿を丁寧に追っている。それによれば、学院は1967年までは学院史資料保存に特化した部署を設けておらず、その働きを「広報室の事務分掌」に位置付けていた。それが1967年に広報室が学院本部に開設されると、「学院史の編集に関すること」が職務分担として含まれるようになったが、それは『七十年史』刊行を意識してのことであった。しかし実際は、広報の発行、規程集の出版等、学院や大学広報の本務に追われ、「学院歴史の編集」に着手できなかったらしい。しかし、徐々に『七十年史』編纂に向けての具体的な動きは起こされてゆく。その中で、「広報室とは別個に独立した学院史編集室設置の必要」が提言された。理事会もまた学院史編纂を決定し、これが1973年の学院史編集室開設につながった。これについては、当時の学院長ギャロットの手腕を感謝すべきである。場所も旧本館

(現在は、大学図書館に建て替わっている)2階北側を得て、そこに事務室と資料室が設けられた。しかしその僅か3年後、学院史資料室は当時の自然科学館1階に移動となるが、そこは予定されていた電子計算機センターが移転してくるまでの、いわば「仮の住まい」であった。ここでは事務室に加え、展示室が配置され、写真展の開催なども可能となった。

さらに移転は続く、1979年に電子計算機センターが開設されると6号館(現在は、言語センターに建て替わっている)3階の教育実習室へと移転。2年後の1981年に同館2階へ移転したが、これとても学術研究所増設で当時の児童教育科教員の研究室が移転したため、その空きスペースを利用したものであった。次は、1987年に6号館から旧1号館2階へと移転したが、これも学生課移転に伴う空きスペースの有効利用であった。部署の移転で生まれたスペースの有効利用による移転であるので、当然ながらその都度、敷地面積もまちまちである。

そのような中でようやく正式な形で落ち着いたのが、1988年5月の創立記念日に1号館2階に開設した学院史資料展示室である。しかしこの場所とても「終の棲家」にはならず、旧1号館の老朽化に伴う建て替えて学院史資料展示室も閉室・取り壊されることとなり、学院史資料と展示物の内、主たるものは旧本館3階に移動。それ以外に収納・公開していた資料は、同館2階・3階・4階に分散展示され、その他の資料や古文書群は、6号館倉庫、図書館などに分散された。

この時期、当時の学院理事村上寅次より、学院史資料の保管のための資料館構想が提案され、1994年の「西南学院歴史資料館設置の必要性」の構想として提案されている。世戸口論考はその内容を紹介しているが、村上の構想は現在の資料センターの機能を越えた壮大なスケールを呈している。特に、アジア地域研究センター、博物館、学芸員資格取得施設の設置構想の先見性は優れていると言わざるを得ない。以上のような意欲的かつ先進的な構想は常任理事会で共有されるも、理事会では検討されていない。今から28年前のことである。後年、博物館、学芸員資格取得施設は形となった。しかしアジア地域研究センターの構想は、今日まで手付かずのままである。もしこれが他の構想案と同様に理事会で検討され、着手されていれば、現在の大学の研究環境や国際化はさらに豊かに発展していたかもしれない。加えて、次の事実は記しておきたい。村上はそれから間もなく1996年に召天した。その際、本人の遺志により、学院史資料整備基金として一千万円が特別寄付の名目で学院に寄付されたが、一般寄付扱いとされ、その後の用途は分からない。理由は「寄付の目的にあった施設が検討されなかったため」であるらしい(『西南学院史紀要』第3号、「西南学院における学院史資料室・事務室の変遷」、91頁)。事務処理上の諸事情があったこととは思うが、本来

的には、寄付者の遺志は尊重されてしかるべきであるので、筆者にとってこのことは決して軽いことではない。

学院史資料室の「旅」はまだ続く。1997年、企画調整課の誕生と共に、学院史業務はこの課に引き継がれた。場所も本館Ⅱに移転。敷地面積はこれまでと比べると格段の狭量となる。世戸口論考によれば、学院史資料室の面積は19.20m²、書庫16.00m²で、それは「資料室とは言え、歩くのに苦勞するほど狭く、作業もできない状況にあった。収蔵できないものは、1階小会議室や階段下倉庫などに分散して格納した」と記している。資料の「受難」とも言える状態である。

その後、2003年の事務局本部の組織改変によって、企画調整課と広報課が統合され、企画広報課が新部署として誕生した。それにより学院史業務は同課に移管されるも、学院史資料室は分化され、場所も企画広報課は本館2階、資料室は本館Ⅱという分散した形で再び受け継がれる。移転はこれで終わりではなかった。2007年の西南子どもプラザの運営開始にともない、学院史資料室は再び移転を余儀なくされた。その後も学院最古の建物である西南学院講堂の大学博物館への改修、旧本館4階の小会議室、同窓会応接室の空きスペースの利用構想など、学院施設の変遷と共に資料室と学院史資料は移転を続けた。まさしく、「彷徨する学院史資料と資料室」である。

世戸口論考は、以上のような「西南学院史資料室の運命」とも言える歴史を、いくつかのポイントをあげてまとめている。その中で筆者に訴えかけたのは、次の叙述である。「事務室及び資料室の移転が4回もあったこと（下線筆者）、資料が分散され、集めた資料を十分に分類できなかったこと」。そして、資料室は、組織改変や建物の建て替えの計画に伴って、「また移転しなければならない」（下線筆者）運命を抱えているという点である。安住の地を見出せなかった学院史資料室と学院資料。それらはどれをとっても、学院と学院の歴史にとって悲劇ではないだろうか。

4. 結びにかえて：高い志と使命を携えるバプテスト資料室

世戸口論考から透けて見えるのは、必ずしも褒められたものとは言い難い学院の、関係資料とその保存に関する見識である。開学100年の歴史を誇り、次の100年を目指して歩き始めた学院がこのままでいいはずはない。言うまでもないことではあるが、「資料」は「単なる書類」ではない。「歴史資料」は「過去の古紙」ではない。たしかに見た目は「紙類」ではある。しかしこれらの「紙類」には、学院の来し方のそれぞれの場面で、学院を愛し担った多くの人たちの顔と、その息づかいが込められている。変転する歴史の流れの中、ぶれることなく建学の精神に立ち続ける努力を重ね、学院

が未来に向かってその使命にふさわしく、そして善く歩むために、先人の苦闘を読み取るための知恵がまつた「紙類」である。いかなる機関も、とりわけ教育機関は、そのような資料を軽んじてはならない。書類に名を記されている人々と共に、名前を記されることのない無数の人々の働きによって、学院は今日あるからである。ドイツ敗戦の40年に当たる1985年、当時の大統領ヴァイツゼッカーが行った記念演説の一節にあるように、過去に目を閉ざすことなく、現在に盲目にならないようにしたい。

「学院の資料を古紙にしない。資料室を古紙の倉庫にしない」を旨とも、戒めともしてゆきたい。ここに資料室存在の意味と使命があると強く思う。バプテスト資料室は、学院史資料センターと共に、西南学院の建学の精神を伝え続ける使命を担わねばならない。加えて、国内の数少ないバプテスト派の教育機関のひとつとして、国内唯一のバプテスト派の神学高等教育機関を擁する学院として、バプテスト資料室は西南学院を超え、日本とアジアにおけるバプテスト研究、バプテスト派の神学教育研究の拠点としての高い志と使命を自覚して余りある働きを志すことが期待される。そのような施設として、学院全体でバプテスト資料室を育てていきたいものである。そのために、各方面からのご理解、ご協力を切に賜りたい。次の100年に向かって「Impacting the World」を標榜する西南学院の使命に応える資料室となりたい。まもなくその芽が出ようとしている。